

緑川から引きはがした由衣を——腕を引っ張り合いながら、青木と黄山が舌打ち混じりにやり合う。

「とりあえず、ローションの貸しがあんだから、オレっちからでしょ♪」

「それでもいいが、萎えるから、すぐに中出しすんじゃねえぞ…！」

罵り合いながらも、二人の視線は由衣に釘付けだった。

すると——その両腕は、まるで求めるように青木と黄山の股間へと伸び、唇は笑みすら浮かべて……。

ちゅぽっ♡ ぬちゅるっ♡ じゅるるう♡

左右から突き出された肉棒を、由衣の唇は交互に受け止め——舌を絡ませては吸い上げ、艶めいた音をいやらしく響かせ続けていた。

ちゅぽっ♡ じゅるるう♡ ぬちゅりい♡

「へへっ♪……いいじゃねえか由衣♪ この前と違って、今日はノリノリだな～♡」

青木が嘲り混じりに笑う。

その姿は、まるで自らすすんで相手を選び抜こうとする“淫らな女”——。だが、実際にはインキュバスの操り糸に踊らされる悲劇に過ぎなかった。

(やだぁ……また……二人同時に……なんて……いやぁ……っ♡)

「ほら由衣♪ まずはオレっちからだ♪ お前の好きな体位、見せてみなよ」

黄山の挑発に応じるように——由衣の身体は勝手に四つん這いへと沈み込む。

ぐちゅっ♥ ぬちゅるう♥

自らの指先を淫部へ這わせ、花びらをクパァと広げながら、前屈みのうつ伏せで指を咥えた表情を見せると——。

「うう〜ん♥ はあっ♥ 後ろお……♥ 入れてえ……♥」

それは彼女の意思とは裏腹に、糸に絞り出された声。

だが——耳に届くのは、ただ欲望を乞い求める雌の声にしか聞こえなかった。

「へっ♪ 由衣……♪ 後ろから欲しいのかよ？ 任せろよ……俺が今、くれてやるからよお〜♪」

ぐちゅっ♥ ぬちゅるう♥

黄山は腰を突き出し、膨れ上がった肉棒を——由衣の尻の割れ目に、沿わせるように押し当てる。

糸に絡め取られた由衣の腰は、否応なく後ろへ揺れ——その仕草がまるで“受け入れを待つ牝”のように見せかけられていた。

(ちがう……っ やめてえ……っ 赤井くん……見ないで……っ)

ぬちゅっ♥ じゅぶう♥

肉棒の先端が由衣の花びらをなぞり、濡れた蜜を絡め取る。

その瞬間、黄山は恍惚の声をあげ――。

「へへっ♪ 無機質なバイブなんかじゃあ、比べもんにならねえだろ？ 本物の熱さで……後ろから、たっぷり可愛がってやるぜ♪」

ぬちゅっ♡ ぐちゅう♡ ずりゅっ♡

そして、肉棒の亀頭が――大陰唇のビラビラを割り、ぬめる熱をかき分ける。

由衣の腰は必死に前へ逃げようと震えているのに――操り糸がそれを後ろへと押し出させ、黄山の硬さを迎え入れる形に歪めていった。

「へへっ……♪ 入るぞ……奥まで、しっかりなあ……！」

ずぷりゅううっ♡ ぐぼっ♡ じゅぶっ♡

「ひゅううっ♡♡」

由衣の喉から漏れた声は、悲鳴のはずなのに――震える唇は、甘美な喘ぎになっていく。

涙に濡れる瞳が「やめて」と叫んでも――淫靡に揺れる腰は、否応なく黄山を咥え込み、ずぶずぶと奥へ奥へと受け入れていく。

（ちがう……っ これ以上……だめえ……っ♡ 赤井くん……助けて……っ 私……壊れちゃう……っ♡）

ぐちゅっ♡ ずちゅう♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡

「あああっ♡ やあっ♡ いやああっ♡♡」

淫らに弾ける蜜音と由衣の甘い喘ぎが重なり——内壁に反響しては、赤井の胸を鋭く抉り裂いていく。

ぐちゅっ♡ ずちゅう♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡

黄山は背を仰け反らせ、嘲笑混じりに叫んだ。

「見ろよ赤井！ 由衣は俺のを奥で迎え入れて、ぎゅうっと締めてきやがるんだぜえ……♪」

その声にかき消されるように——由衣は涙に濡れた瞳で震えながらも、目の前の青木に向かって腕を伸ばしていく。

それは促されるよりも先に、自ら求めてしまっているかのような仕草で——指先が、その肉棒に触れようとしていた。

（ちがう……こんなの私じゃない……っ 赤井くん……見ないでえ……っ）

青木は待ち構えていたかのように、由衣の舌先に肉棒の先端を擦りつけ、わざと焦らすように頭だけを舐めさせた。

その様子を赤井に見せつけながら、勝ち誇った声で吠える。

「どうだ赤井っ！ あの時見せてやった映像と同じだろ！ 由衣はこうやって、自分から俺たちに奉仕する女なんだよっ♪」

その言葉が突き刺さった瞬間——。

由衣の瞳から、かすかな涙が溢れた。

思い出されたのは、“三人に襲われている映像”を赤井自身に突きつけられ、必死に否定しても信じてもらえなかった、あの日の記憶。

(いやあっ……っ　ちがうのに……信じてほしかっただけなのに……っ)

しかし、訴えの涙はすぐに覆い隠された。

青木の肉棒が——そのまま彼女の“口奥”まで押し込まれ、頬を膨らませて唇を塞ぐ。

同時に、背後から突き続ける黄山が“膣”を激しく打ちつけ——。

ぐちゅっ♡　ずちゅう♡　ぱんっ♡　ぱんっ♡　…♡

じゅぶっ♡　ぐぼっ♡　ぶじゅっ♡　んぼっ♡　…♡

由衣は、再び前と後ろから同時に串刺しにされ——涙に濡れた表情さえ、覆い隠されていく。

(いやあっ……っ　こんなの……♡　欲しくないのに……っ)

だが。

裏切るように身体は小刻みに震え、深奥を抉られるたびに膣は——きゅうっと締め込み、拒絶の叫びとは逆に、肉棒を迎え入れてしまっていた。

じゅぼっ♡　じゅるるっ♡　ぐぼお♡

「んぐううっ♡　んぶっ♡　んぶばああっ♡」

青木の肉棒で塞がれた口から漏れるのは、必死の否定の叫びではなく——甘美に歪められた喘ぎ声。

内壁に反響するその音は、由衣自身を裏切るように“淫靡なしらべ”となって響き渡っていた。

(やだっ……ちがうのに……どうして……からだだけが……♡ 勝手に……♡)  
ぬちゅっ♡ ぐちゅう♡ ぐぼお♡

涙に濡れた頬は、苦悶を訴え続けているのに——腰は、背後の黄山に淫らに揺れ……蜜を滴らせ……男の肉棒を濡らし続けていた。

じゅぽっ♡ じゅるるう♡ ぐぼお♡

口を塞がれながらも、由衣の喉奥から漏れる声には——確かな甘美の震えが混じり始めていた。

(やだっ…… ちがうのに……っ 身体が……勝手に……♡)

その反応に——。

インキュバスは、にやりと口端を吊り上げ、指先をひらりと振る。

ピンッ……！

操り糸が一斉にほどけ、由衣の身体から離れていった。

「クククッ♪ いいねえ……あとは二人に任せて……さあ、クライマックスと行こうじゃないか……♪」

暗闇に響くその嗤いは、まるで舞台の最終幕を告げる合図のように肉壁を震わせた。

ちゅっ♡ ずちゅっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡

背後から突き上げる黄山の肉棒が、容赦なく奥を抉り――。

前では、先ほどまで強制されていた淫靡な腰使いの残像のまま、身体は勝手に震えていた。

「んぐううっ♡ んぶうっ♡ んじゅるるるう♡」

塞がれた口から零れる声は――否定の叫びではなく、甘く溺れる喘ぎに変わっていた。

(ちがう…… いやあ……っ♡ こんな……私の意思じゃないのに……っ♡  
でも……っ♡ だめえ……♡ 奥まで擦られて……っ♡ からだ……勝手に  
……壊れちゃうううっ♡)

ぬちゅりい♡ ぐぼっ♡ じゅぶっ♡ …♡

膣壁は裏切るように――きゅんきゅんと締め、黄山の肉棒を求めるかのように絡みついていく。

快感の波は、もはや抗えぬほど大きく膨らみ――。

涙に濡れた瞳を閉じる由衣の脳裏に浮かぶのは、ただ一人。

(赤井くん……見ないで……っ こんな……♡ 見られたら……私……もう  
……っ♡)

じゅぼっ♡ ぬちゅ♡ ぐじゅぼっ♡ …♡

肉棒の熱に焼かれるように、由衣の全身が震え——絶頂の頂へと駆け上がっていく。

「んぐうっ♡ んぶうっ♡ はああああっ♡」

耐えきれず、由衣は——青木の肉棒を口から吐き出し、唇から糸を引いて喘ぎ声を漏らした。

その瞬間、青木がニヤリと笑う。

「黄山、代われよ！ 由衣がイキそうになってやがる……ここからは“チキンレース”だ！ どっちが、イキ我慢させられるか勝負しようぜえ♪」

黄山が鼻息を荒げ、背後から腰を叩きつける。

「ククッ……潮吹かせちゃった方が負けだろ？ だったら——勝った方が今日の“中出し権利”ゲットってことで、どうだあ？」

ぱんっ♡ ぱんっ♡ ずちゅっ♡ ぐちゅるるっ♡ …♡

淫らな音が内壁に反響し、赤井の胸を無情に抉る——。

ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぐちゅり♡ ずちゅるるっ♡ …♡

二人の突き上げが、さらに淫靡な音を響かせる——。

（やだっ……っ♡ そんなの……っ♡ 私のおまんこで……遊ばないでえ……っ♡ いやあ……♡ イキたく……ないのになっ♡ もうっ……っ♡）



涙に濡れた瞳は苦悶を訴えるのに——膺は裏切るように震え、甘美な快感の波が押し寄せていく。

残酷な“ゲーム盤”にされた由衣の身体は、絶望と快楽の狭間で、なおも喘ぎ声を絞り出されていた——。

【体験版おわり】